

「幻世の祈り」第一部 家族狩り」(天童荒太著) 高校教師、刑事、児童相談センター職員がぶつかる「家族」とは、人間のかなしさ、醜さ、気高さを描く魂の物語。「永遠の仔」から五年、著者(自身)の書き下ろし、狂気の現代を鋭くえぐる。(新潮社・本体四七六円)

「四季・大台ヶ原」魅せられし山」(山本治之著) しっかりとした霧の中で静かに満開を迎える高山性の花々、厳寒期に朝日を受けて輝く樹水の素晴らしさなど、大台ヶ原の魅力を十年にわたりに撮り続けたカメラマンの写真集。(光村推古書院・本体三、八〇〇円)

ほんばこ

「出身県の性(さが)」(岩中祥史監修) ベストセラー「出身県でわかる人の性格」の著者が都道府県の県民性を分かりやすくイラストで解説。類型的で、当たっているかは別として、マンガ方になってみると面白い各県の特徴的な性格。(アスコム・本体一、〇〇〇円)

「裏通りパラダイス」大阪人情の味付け」(南しゅんけい著) 大阪の下町にある焼き肉屋から展開する、人情物語。人々が織りなす純粹で真つす、悲喜こもごものストーリーは読後感もさわやか。不動産業を営む著者は生駒市在住。(浪速社・本体一、二〇〇円)

読書



人格を磨き独自の美学

本書のプロローグは、サッカーの玉様ペレとともにサントスFCでプレーをした、半分日本人の血が流れる選手タイジロウ・カネコの「あの技」の話から始まる。彼は、一九六八年のポタフォゴとの試合で、パスを要求するペレの声を無視し、ハットトリックを決めたトニーニョへ正確なクロスを出し脚光を浴びた。ディフェンスの頭をふんわりと越える



私の本棚



北森 絵里

「あの技」の話から、私は「王国から来た伝道師たち」の世界に一気に引き込まれた。

Jリーグ発足から十四年目になる今年、かつてのブラジルの名選手ジッコが代表チームの監督になり、これほど多くのブラジル人サッカー選手が日本でプレーすることを、四十年前に誰が想像したであろう。しかし、それは偶然でも不思議なことでもないといふことは本書を読

むと十分に理解できる。

本書の前半では、「両親の祖国へやって来た」日系ブラジル人たちがサッカーリーグ時代の日本のサッカーの発展に

かにかかわったかが淡々と語られる。後半では、Jリーグ発足後に来日したブラジル人プレーヤーたちの目を通して日本のサッカーが浮き彫りにされる。どちらの時代にも両国のサッカーには技術的にも戦術的にも大きな差があり、その間を埋めようと奮闘する彼らの姿が、著者の真摯(しんし)な筆致を通して生き生きと描写される。

といつても、本書の焦点は、「ブラジ

サッカー移民

王国から来た伝道師たち

加部 究・著



双葉社・一、八〇〇円

ルのサッカー礼賛、日本のサッカーへの「苦言」にあるのではない。伝道師たちは「ブラジルの」とか「日本の」といった「サッカー」を語るのではなく、「自分のサッカー」を語っているだけだ。日本に個人技に長(た)けたストライカーがなかなか生まれぬ理由を日本文化や日本人の国民性に還元させて論じるような、メディアではしばしば旨にする国民性



双葉社・一、八〇〇円

とサッカーを結びつける論調にきえき)している私には、本書のような、プレーヤー自身のサツについて語りほす快だ。

本書に登場するプレーヤーはサッカーには「ブラジルの」やといった修飾語はつかない。伝は、年齢を重ねる過程で自分の人格を磨いていくように、サツを通して独自のサッカー美学をてきたのだ。

最後に本書の意義に触れておラジルの日系人サッカーリーグきんとまとめられたのは本書ではないだろうか

著者があとがきでるように、本書に豊富な逸話は「一や書籍企画ではすられそう」内容ない。だからそいのであり、本書そこにあるといエ(天理大学国際ブラジル・ポルトー助教)

根底から見直す「食」

スローフードの完全ガイド

食の安全・安心が声高に叫ばれながら、異物混入や汚染、感染症など現実には悪化の一途をたどっているように見えるのはなぜか。食

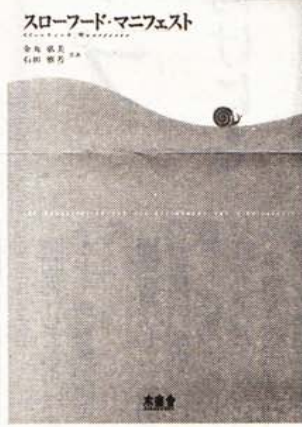
をめぐると、さまざまな疑問に答え、いま注目されているスローフードについて知ることが一冊にまとまっています。このくびた「スローフード・マニフェスト」(金丸弘美、石田雅芳著) 写真IIが発刊された。

規格・標準化された生産と消費主義を第一に考えるド先駆者と、スローフード

協会イタリヤ本部唯一の日本人スタッフによるスローフードの完全ガイド。「時間の価値が認められ、人間と自然が尊重され、喜びが存在理由となる世界を守る

ために発展させて行かないためにはならない」という理想が現実のものとならない限り、私たちに未来はないのかもしれない。「スローフードはすべて

(木楽舎・本体一、〇〇〇円) 忠



スローフード・マニフェスト